

『 私のふるさと 香川県東部 』

私は出生地こそ東京都（杉並区荻窪）なのだが2歳と少しの昭和19年の春に戦争の激化により父母の郷里である香川県に疎開して高校を卒業するまでを過ごしたので名実ともにここが我がふるさとである。日本有数の小さな県であり、知名度も低く最近ではやたら「うどん」ばかりをPRしているのはあまり感心できないが県民性は概ね勤勉・温和であると思う。県都・高松市を真中に東讃・西讃と呼称されるが私にとって縁が深いのは西讃に較べてあまり発展しない東讃地区である。そんな取り残されたような地域が私のこよなく愛する郷里なのである。

1) 父祖の地であり毎年、墓参に行く旧・引田町^{ひけたちょう}（現・東かがわ市）

県の東端に位置し徳島県との県境の町。古くは瀬戸内交易の港として栄えたようだが皮肉にも鉄道が開通して寂れたようである。一部には旧家の残っている町並みもあって、時にTV番組で紹介されることもあるが全体的には活気に乏しい。

但し、県境の大坂峠から眺める瀬戸内海は絶景であり昨年、某週刊誌の巻頭グラビヤを飾った。

余談ながら戦後、東大総長を務めた南原繁とブギの女王で名を馳せた笠置シズ子がここから出ている。（お固い南原総長が笠置シズ子・後援会長を務めたことは有名）

私の祖父・元助（二代目）は底抜けのお人好しだったようで何かの保証人になったことで先祖から受け継いだ田畑・家屋が全て他人の手に渡り今は墓所のみが残っており幼少年時代より墓参に行くことが我が家の慣例であり若い頃の父母とともに懐かしい記憶である。



大坂峠の展望台より引田町を望む

今は長男の私が正に「墓にフトンを着せる」ためにお盆帰省をしている。

当地の名物は和三盆（砂糖を固めた和菓子）でネット販売などを通して人気商品となっている。

2) 幼少年期を過ごした母の実家のある旧・津田町（現・さぬき市）

ここも旧・港町であったことは引田町と似ているがあまり特徴はなく唯一の自慢は5万坪に及ぶ根上り松の松原である。（小学校も中学校もこの松原を切り開いた一画にある。尤も中学校は今年3月に統合により閉校になり誠に残念！）昭和30年代の初め浅丘ルリ子・主演の日活映画のロケがあつて授業そっちのけで皆で見に行った。



この松原は日本一と郷土の人たちは自負している。

眼前の海は、その形より蟹甲湾と呼称される。

町の背後に位置する雨滝山（253m）は小中高の校歌に全て登場する。山城があったが土佐（高知）の長宗我部に滅ぼされた悲劇の伝説がある。なお城主の安富氏は細川方の重臣であったようなので、ひょっとしたら母方の先祖も剣を刀に持ち替えて応仁の乱の応援に京都へ馳せ

参じたかも・・・（当時は未だ兵農分離がなされていない）。私の家は地域では数少ないサラリーマン家庭であった

津田の松原 　　が大半の家庭は農業か漁業で船大工と言う職業もあった。

お蔭で私は恵まれた自然環境の中で良き幼少年期を過ごすことができた。野菜作りと海釣り（魚は貴重な蛋白源）によって米以外の食べ物はほぼ自給したので貧乏人の子沢山（5人きょうだい）ながら何とかやって行けたのだろう。

そして現在の財産と言えるのは小中学校時代の仲間たちとの交流である。世話人グループ（男女10名ほど）で毎夏、会合を行い同期会は2～3年毎に開いている。

八十八箇所のお遍路コースは第86番の志度寺から南に急カーブして山に向う。それ以東にも立派な寺がいくつもあるのにコースから外れてしまっているのでお遍路ブームの恩恵にも浴さずこれも残念。（結願所：第88番の大窪寺が平成の大合併により同じ「さぬき市」になってしまったのは皮肉と言うしかない）

3) 高校時代を過ごした県都・高松市

かつては「四国の玄関口」と言われた高松市も瀬戸大橋（＝1988年に開通）をはじめ本四架橋が3本も出来ると交通が便利になり、かつてあった官庁や大企業の出先の多くが引き揚げてしまい「支店経済」で栄えた街が衰退する結果になっている。

受験校である高松高校には思い出は少なく、高松の街も私には馴染みが薄い。

毎年クラス替えがあったが2年生の時は文化祭や修学旅行を共にしたことからも時々クラス会をする。学校全体では同期会や同窓会の類が非常に盛んであり、できるだけ出るようにしている。

今で言う就活時のエピソード。（私の履歴書を見て）スポーツ好きの人事担当常務から「高松と言えば昔から野球で有名だが君の高校からは、どんな選手が出ているのかね？」と質問されたので「ハア、戦前は三原脩、戦後は穴吹義雄が出ています。」と答えたら「ほう、三原に穴吹か、それはスゴイな！」と言われたこと。（因みに三原の終生のライバルだった水原茂は高松商業、ブーヤンこと怪童・中西太は高松一高の出である）。

4) 亡父の遺した茅屋のある屋島（高松市の東部）

父は高松市内の社宅暮らしを経て60歳の定年により、やっと市郊外にマイホームを得た

のだがわずか7年住んだだけで急死、母もその9年後の亡くなり、永く空き家状態だったが5年前より次男一家が住んでいる。築47年になり綻びも目立つが私にとっては帰省時の宿に過ぎないので格別の思い入れは無い。

第84番札所の屋島寺、第85番の八栗寺が近い。

源平の古戦場で名高い屋島は平家物語の那須与一・扇の的の舞台。

かつては修学旅行などで賑わったが近年、観光地としては寂れてしまった感がある。

この山頂（標高：284mなるも名前のおり真っ平であるが）より眺める瀬戸内海もまた絶景である。



屋島山頂より源平合戦の古戦場を望む

平成27年9月

佐藤 彰男